みたけ山伏〈やまぶし〉（篠山町）

今から千二百年も昔のことです。奈良時代に役〈えん〉の小角〈おつぬ〉というお坊〈ぼう〉さんがおりました。大和〈やまと〉の国（奈良県）の大峰山に入って、山深いおそろしいようなところで毎日くらし、心身を鍛〈きた〉え、ついに修験道〈しゅげんどう〉という教えを考え出しました。そして、大峰山に大修験道場を開いて、多くの弟子〈でし〉修験者（これを俗に山伏という）たちを育成〈いくせい〉しました。

後年、小角は第二の道場を開くために、数名の弟子山伏を従〈したが〉えて、道々、地方の人に教えを広めながら道場の適地をさがし求め、ついに丹波の国までやって来ました。今の篠山町の北方にそびえている一大連峰〈れんぽう〉をながめ、これこそ、修験道をひらくよい霊〈れい〉地と見定めて、第二の修験道場を築〈きず〉きはじめ丹波大岳寺〈みたけじ〉と名づけました。
弟子達とともに山道をひらき、地方の人びとを教化〈きょうげ〉しながら、力をあわせて、道場その他の建造物や山中たくさんの行場〈ぎょうば〉を整えました。

大岳〈みたけ〉は多紀郡の北壁〈ほくへき〉ともいうべき連峰で、主峰「みたけ」は標高八百メートル、東は「小金〈こがね〉が岳〈だけ〉」「西は西が岳」と連なり、近時「多紀アルプス」とも呼ばれております。
千二百年前、全山うっそうと茂〈しげ〉った大森林は、いたるところに、きびしくそばだつ大岩石をおおい毒〈どく〉蛇・怪獣が住んでいる、ものすごい所だったのです。古名「藍婆〈らんば〉が峯〈みね〉」と呼ばれていたそうで、いかにおそろしい所だったか、推測〈すいそく〉できるわけです。

道場の開かれた当時は、仮堂〈かりどう〉や水飲み池ぐらいが造られた程度と思いますが、それから二百年程の間に、山門や本堂、堂塔〈どうとう〉が建ち、三十箇所ほども行場が設けられました。ですから大岳道場の盛んな時には、幾百人という修験者がたてこもり、多くの堂、塔、行場で、それぞれ修練〈しゅうれん〉し、燈明〈とうみょう〉をともし鉦鼓〈しょうこ〉をならし、お経〈きょう〉を唱〈とな〉えたものでした。
平安時代から鎌倉時代にかけて、丹波大岳の修験道は、発展の一途〈いっと〉をたどり、日本国中指折りの大道場となりました。

そこで、大和の大峰では、本家本場のお株〈かぶ〉を丹波に奪〈うば〉われたとしてねたみ、とうとう室町中期の文明年中（一八四二年）に、大和の山伏勢数百名が大挙〈たいきょ〉して、突如〈とつじょ〉、丹波大岳におそいかかり、この道の本拠〈ほんきょ〉争いの戦をしかけました。丹波方では、不意のことで応戦する暇〈いとま〉もなく、全山各地に火をかけられ、数百年来のすばらしい堂、塔、伽藍〈がらん〉はすっかり焼き払われたのでした。
今は堂塔の礎石〈そせき〉と行場の遺跡〈いせき〉が、山中のここかしこに見られるのみであります。